平成 22 年度大学生の力を活用した集落活性化調査委託事業　報告書

人が資源のまちづくり

平成 23 年 3 月

東日本国際大学

地域まちづくり研究グループ

目 次

Ⅰ はじめに
1 東日本国際大学地域まちづくり研究グループについて

Ⅱ 塙町の地域概要
1 塙町の歴史
2 塙町の概要
3 塙町矢塚区について

Ⅲ 調査内容と結果
1 調査内容
2 調査結果

Ⅳ 矢塚区調査結果の分析のまとめ
1 アンケート結果から
2 矢塚区の強み・弱み～調査内容から～
3 矢塚区活性化の方向性

Ⅴ 矢塚区活性化のためのアイディア
1 塙町で若返りツアープロジェクト
2 矢塚キッチンプロジェクト
3 二地域居住推進プロジェクト

Ⅵ おわりに
謝辞

資料編
資料１ 福島県「大学生の力を活用した集落活性化調査」に関するアンケート
資料２ 韓国人から見た日本の中山間地活性化～塙町矢塚区～
資料３ 集落活性化県民討論会のまとめ

Ⅰ　はじめに

1　東日本国際大学地域まちづくり研究グループについて

私たちのグループは今回の集落活性化事業にあたり、有志７名により結成されました。全員が経済情報学部に在籍する２・３年生の女子学生で、うち３名は韓国からの留学生です。

本来、本研究グループは。大学が所在するいわき市の中心市街地活性化のために、各種イベントでの手伝いや参加、アンケート調査、学生視点からの提案などで、かかわってきました。今回のような他地域に出ての本格的な調査研究は、全員初めてのことです。不安を抱きながらも、矢塚区の方々や先生方の手助けご協力をいただいて調査を進めることができました。

●調査体制

調査グループ	東日本国際大学地域まちづくり研究グループ
グループ代表者	
調査実施者	
指導教員	
調査対象集落名	福島県塙町矢塚区

地域まちづくり研究グループのメンバー

Ⅱ　塙町矢塚地区の地域概要

1　塙町の歴史

塙町には、台宿地区、伊香地区があり、伊香地区は縄文、弥生時代の遺跡が多数発見され、早い時期からの集落の形成がみられました。文献のうちで塙町に関する地名が見られるのは、弘仁（811）の「日本後記」の条です。

文治５年、源頼朝が結城朝光に白川などを与え、よって塙町もその所領となりました。しかし、16 世紀末頃に白川領土全体が佐竹氏の勢力圏に編入されたため、佐竹義宣が慶長７年に出羽国秋田に移封されるまでは支配下に置かれました。のちに、塙町をはじめとする南郷の地は幕府に収公されました。これが塙地区が幕府の直轄になった最初です。

近世初期から幕領として代官の支配するところと、棚倉藩によって支配される村々が生じるようになりました。また、名代官として名高い寺西封元などさまざまな代官が塙の地を治めました。

塙地域は、慶応４年に仙台藩に属し、明治元年には棚倉藩に編入されました。明治４年の廃藩置県で棚倉県、同年平県、そして磐前県に諸族が移りました。明治 22 年、市町村制により常豊村、笹原村、高城村、石井村が生まれ、昭和 23 年、常豊村が町政を施行して塙町に改称されました。昭和 30 年、町村合併促進法により、塙町と笹原町が合併して塙笹原町となり、同年に石井村と高城村大字台宿、伊香、植田及び真名畑が合併して再び塙町となりました。昭和 32 年に町の一部を矢祭町に編入し、続く 34 年に棚倉町大字八槻の一部を編入し現在に至っています。

2　塙町の概要

①位置と地勢

塙町は、福島県の南端 36°57´東経 140°24´海抜 193．4mに位置し、東は東白川郡鮫川村、茨城県北茨城市、高萩市、里美村、南は東白川軍矢祭町、北は東白川郡棚倉町に接しています。東西に約 27 キロ、南北約 20 キロ、面積 211.60 平方キロの村です。

地勢は町の東側に阿武隈山系、西側に八溝山系が連なり、町の四面は丘陵地に囲まれている、東西に長い町です。河川は阿武隈山系を水源とした川上川と渡瀬川が、八溝山系を水源とした久慈川がそれぞれ南北に縦断しています。町の大半は、久慈川水系に属していますが、南東の一部は、四時川水系の流域に属します。

山地は、久慈川本流とその支流の川上川などが形成する谷によって、西から八溝山地、九ッ山と羽黒山の地塁状山地、及び、阿武隈高地に三分されています。

人家はこうした山地に広く散在していますが、久慈川沿いの平坦地に小規模な市街地が形成されています。交通網は、久慈川の流れに沿って、ＪＲ水郡線及び国道 118 号が走り、郡山市、水戸市へ約１時間半の距離です。また白河市まで国道 289 号で 50 分の距離です。

②気象

塙町は基本的に温暖で、過去 5 年における最暖月の月平均気候は、29℃、最寒月の平均気温は 14.7℃です。過去５年における平均降水量は 1,514 ミリで、また八溝山地と阿武隈山地にはさまれた谷地形を形成していることから、日較差、年較差が大きく、内陸盆地的な気候を有します。

③人口世帯

塙町の世帯は平成 23 年 3 月 1 日現在 9,969 人です。昭和 60 年に一時人口は回復の兆しを見せましたが、再び減少に転じています。しかし幼年人口、生産年齢人口が減少を続けるなかでも、老年人口は増え続けています。また老年人口比率が 22.1%あり、福島県全体よりも著しく高く、これによって、高齢者の割合が多いだけでなく、高齢化の進展も早いことは明らかです。一方、世帯数については、核家族化の影響から増える基調です。

④就業構造

総就業人口は 6100 人です。就業構造については、第一次産業が衰退し、第二次産業、第三次産業が増加する、全国的な流れと一緒です。ちなみに平成 17 年度の国政調査によると、第 1 次産業 1,113 人、第 2 次産業 2,028 人、第 3 次産業 2,362 人です

3. 塙町矢塚区について

本調査事業は、塙町矢塚区において実施しましたが、その概要は次の通りです。

①位置

塙町南東部、中心部から車で 30 分以上

②気候

高山気候

③世帯数

35 戸、111 人（男性５５人、女性５６人）

④農林水産業、その他

- 主に高原野菜や花（ダリア等）
- 林業、酪農（牛）
- ヤマメ等（川が綺麗）
- 自然蒼鉛、ホセ鉱、自然金、柘榴石などが産出する

Ⅲ　調査内容と結果

1　調査内容

①調査方法

今回の調査では、地区住民へのヒアリングおよびアンケート調査、現地のイベントへの参加や実地見学、農林業体験などを行いました。

ヒアリング調査では、2人1組となり、予め連絡しておいた家庭を訪問する形で実施しました。アンケートは区の回覧板を通じて全世帯に対し記述式の質問票を配布しました。また、子どもまつりや、地区の駅伝大会のイベントにも参加しました。農林業体験では、矢塚区の主産業の一つである林業の体験、ダリアの採取、こんにゃく作り等を体験しました。そうした体験やヒアリングの結果から、今後の矢塚区の活性化策についてまとめました。

②調査経過

今回の調査は、現地訪問を計 6 回行いまいしたが、その実施日と主な内容は次の通りです。

●調査経過

回数	年月日	調査内容
第 1 回	2010. 08. 04	現地入り＆顔合わせ
第 2 回	2010. 08. 28	現地周辺の視察および意見交換会（＋アンケート調査）
第 3 回	2010. 09. 18	現地調査
第 4 回	2010. 10. 09	やつか子ども祭りへの参加
第 5 回	2010. 10. 22	現地調査（戸別ヒアリング）
第 6 回	2010. 11. 03～04	宿泊調査（農林業体験＋ヒアリング）

2　調査結果

①　第 1 回現地調査

第 1 回調査は 2010 年 8 月 4 日に実施しましたが、その主な内容は現地入りと矢塚区方々との顔合わせでした。その時の話合いから得た矢塚区の概要は次の通りです（一部再掲）。

・区長　渡邉松吉（わたなべまつよし）さん
・　人口　111 人（男性 55 人・女性 56 人）
・　世帯数　35 世帯、高齢化率　31.5％
・　塙町中心市街地から南東部 22km の山間地。標高 720m。
・　茨城県高萩市・北茨城に接している。

・　全 35 世帯がコミュニケーションを大切にしており、PTA・子供会に参加。
・　国有林で占めており農林業が盛ん。

●教育施設

塙町(全体)　小学校 5 校
　　分　校 1 校　} 計 6 校
　　中学校 1 校

矢塚区　　片貝小学校矢塚分校（児童数 6 名）ほぼバス通学〔3 往復〕

●交通手段

主に車かバス。※買い物
塙町または高萩(茨城県)に行く。移動販売(魚屋)

●職業

林業。主に炭焼きをしていたが、現在はパルプ(紙)に加工。
区長渡邉さんは「品質改良」による切り花を生産している。(ダリア、桜、尾瀬の花など)
塙町、棚倉、須賀川などで働く人もいる。(車の整備工場など。)

●矢塚区の行事

5 月 3 日　鮫川漁業組合と合同で「魚のつかみどり」
8 月 15 日　矢塚区・青年会による「盆踊り」
9 月 11 日　塙町・矢塚区「敬老会」(75 歳以上)
10 月 9 日または 10 日　こどもまつり、分校 PTA による「収穫祭」

●現状・課題

「現状」
・　2 世帯が矢塚区に住みたいと希望
・　平成 20 年福島県地域づくり統合支援事業を活用し「里山づくり」開発の計画書を作成。
・　平成 21 年～23 年度に矢塚区分校の裏山を「矢塚希望の森」として里山づくり進行
・　平成 24 年 4 月小学校・分校「廃校」⇒笹原小学校と統合

「課題」
・　分校と裏山の里山を一体化した集落の活性化策が今後の課題。

②　第 2 回現地調査

第 2 回調査は 2010 年 8 月 28 日に実施しましたが、調査の主な内容は、現地周辺の視察と事前に実施したアンケート調査（後述）に基づく矢塚区の方々との意見交換会でした。意見交換は約 2 時間行われましたが、その時出された意見の概要は次の通りです。

●野菜について

・　トマトやインゲン、白菜などとても美味しいものが採れる。採れたてはとくに美味しい。
・　「矢塚ブランド」をつくり、インゲンなどをブランド品として取り扱ったらどうか。
・　買いにきてくれる人はなかなかいないので、野菜をネット販売したらどうか。

・　宅配で売るなら直接自分たちで売って、ふれあいを持ったらどうか。

●自然について

・　山の景色が奇麗なのでトレッキングコースなどを作って景色を楽しんでもらうのはどうか。

・　夜空もとても奇麗なのでこれも活かせないか。

・　小動物や野鳥もたくさん見られるので観察してもらったらどうか。ただ見られる保障はない。

・　水は天然水や井戸水を利用しているため、ペットボトルの水より美味しい。水質を調べてみたらどうか。

●山菜について

・　山菜も何でも採れるし美味しいので活かしたい。

・　山菜を活かした何かをするなら退職した人たちに手伝ってもらったらどうか。例えば山菜の案内人として案内し、観光客自身に山菜を採ってもらい食べて楽しんでもらう。

●廃校になる分校について

・　林業の研究施設にしたらどうか。

・　加工場にして、来てくれた人に加工したものを食べてもらったらどうか。

・　体験学習の施設にしたらどうか。

・　宿泊施設にしたらどうか。

●その他、問題点など

・　退職した人でも元気な人が多いのでボランティアとして協力してもらう。

・　来年にはインターネットができるようになるのでそれを活かしたい。

・　道路をもっと整備しないと人が来ないのではないか。

・　山菜は他県の人が来て勝手に採っていってしまう。ゴミを捨てていく人もおり、車で来るため子供たちにも危険である。このことで外部の人が来るのを嫌がる人もいる。

③ 第 3 回現地調査

第 3 回調査は 2010 年 9 月 18 日に実施しましたが、調査の主な内容は、ⅰ道の駅にて情報収集、ⅱ塙町と隣接している矢祭町について、ⅲ湯遊ランドと周辺の施設を視察、ⅳ片貝小学校矢塚分校についてでした。その概要は次の通りです。

ⅰ道の駅について

➢　情報面

道の駅では塙町案内所としてたくさんのパンフレットやチラシが備えており、塙町だけではなく市外や近隣の県などの情報も得ることができる。（茨城県、栃木県など）。また、矢塚区から近い湯遊ランドはなわのパンフレットも置いてある。

➢　道の駅の役割

道の駅にはお食事処だけではなく塙町で採れた農産物や特産品であるこんにゃ

くを使った独自のお土産が豊富に備えてある。

その中の一つでもあるダリアソフトは「町の花」であるダリアを使ったソフトであり地元の人々をはじめ多くの観光客に親しまれている。

➢ 今回の体験

今回、実際にダリアソフトを食べてみたところ、初めての人でも食べやすくほんのりダリアの香りが広がるので、多くの人に親しまれている理由の一つだなと感じられた。

ⅱ矢祭町について

塙町に隣接する矢祭町。塙町との違いがあるか調査を行った。道の駅から矢祭町は約 15 分。町中にリオンドールがあり生活するにあたって塙町より便利な点がある。

ⅲ湯遊ランドについて

湯遊ランドにはダリア園が近くにあり地元の人を始め、市外や県外など多くの観光客が見られた。

ⅳ片貝小学校矢塚分校について

片貝小学校の裏山『希望の森』を視察。現時点では、苗木などが植えられているだけで、この森を生かし矢塚を活性化させる案を考えていかなければならないと感じた。

ⅴ第 3 回調査での感想

今回は、地元の人の案内ができない状態で矢塚区を散策しましたが、地元の人しか分からない観光地があるなど、課題が多くあることが感じられた。

また、いざ地元の案内なしで矢塚区を観光する際の看板など観光客を配慮した案内などをしていかなければならないのではと思いました。

片貝小学校矢塚分校にて

やつかこども祭りでの一場面

④ 第 4 回現地調査

第 4 回調査は 2010 年 10 月 9 日に実施しました。調査の主な内容は、やつかこども祭りへと収穫祭（バーベキュー）の参加でした。その概要は次の通りです。

●こども祭り

＜場所＞

片貝小学校矢塚分校～矢塚区

＜時間＞

１０時半～１２時

＜参加者＞

分校の児童及び本校からの児童、先生方、保護者、区民

＜内容＞

一緒にお神輿を担ぐなどして祭りに参加し、区民たちと交流を図った。

また、同時に区民の方に同行してもらい、区内を案内してもらった。

＜こども祭りについて＞

- 区民の方の話によれば 30 年は続いているお祭りだとのこと。分校の行事としてスタートした。
- 祭りは児童たちが地区の各家の前でお神輿を担ぐというもの。
- 片貝小分校を出発し、矢塚区を一周してまた分校に帰ってくるというコースを辿る。
- 各家々の間が広いため、その間の移動はお神輿を軽トラで、児童たちを保護者の車で移動させていた。
- 伺った家からは子供たちに紅白のお餅とお菓子が渡される。
- 児童数が少ないため片貝小本校からも児童が手伝いに来ていた。

●バーベキュー（収穫祭）への参加

＜場所＞

片貝小学校分校校庭

＜時間＞

１２時～１６時

＜参加者＞

こども祭りと同じ

＜内容＞

こども祭り終了後の恒例だというバーベキューに参加させていただき、矢塚で採れた野菜と山菜が使われた料理をいただいた。

児童の保護者の方から分校や矢塚区のことだけでなく野菜の美味しい調理方法を教えてもらったり、児童たちと遊んだりとゆっくり交流することができた。

また、以前見ることができなかった分校の中の様子を拝見することもできた。

⑤ 第 5 回現地調査

第 5 回調査は 2010 年 10 月 22 日に実施しました。調査の主な内容は、戸別ヒアリングによる現地調査でした。矢塚の方、学生、教員の 3 人の２チームで訪問してのヒアリングでしたが、抜粋した概要は次の通りです。

●Ａさん宅

ⅰ家族構成

両親と子夫婦の４人家族。現在、主となる職業はしておらず、副業として林業・農業を営んでいる。農業では豆やトマト･いんげんなどを栽培しているが出荷はしていない。

ⅱ交通手段

自家用車３台（乗用車１台・軽自動車２台）

ⅲ生活で不便を感じること

一番は医療問題。塙町の病院までは 20km(車で約 30 分)かかってしまう点。また、買い物をする点でも塙町までの移動時間がかかるため月に 1 回程度。その他食料品などは、栽培している農産物や、農協から契約の食料で賄っている。（肉・魚）

ⅳ矢塚区の誇れるもの・自慢できるもの

自然の空気・水。夏には避暑地になること。矢塚自体に魅力があること。

ⅴ矢塚の今後

年配が増えてしまうこと。後継者(若者)がいないこと。なにより矢塚区の人口問題が不安である。

「訪問して感じたこと」

最初の訪問宅ということで流れが掴めず上手く聞き取り調査ができなかったのですが、やはり、話を聞いていて矢塚区の人口問題・そしてお年寄りの健康の不安は大きいと感じた。万が一の時があっても救急車が来るまで多く時間がかかってしまうなど、まだまだ考えさせられる問題が多いことを感じました。

●Ｂさん宅

ⅰ家族構成

親と子の２人。職業は農業を営んでおり、主にトマト(品種:もも太郎)を栽培し、農協に出荷し収入を得ている。

ⅱ交通手段

自家用車２台（乗用車１台・軽自動車１台）

ⅲ生活で不便を感じること

一番は医療。白河や高萩の病院を利用している為、移動時間がかかる。また、Ｂさんのお母さんは郡山市の病院なども利用するためバスなどで移動する際の体力に疲れを感じる。また、冬の厳しさ（雪など）老人だけでは不安なことが多い。

矢塚希望の森にて

ヒアリング調査の途中

ⅳ　矢塚区の誇れるもの・自慢できるもの

矢塚の自然（空気・水など）矢塚区自体が自慢であり、他地域には行けない。

ⅴ矢塚の今後

矢塚の自然が大切なので壊れないようにして欲しい。仕事がないことが現在の不安。

「訪問して感じたこと」

直接地元の人の話を聞いてみると、矢塚区の今後を心配し不安を抱えている。ということが改めて知りました。矢塚区全体は労働力を備えていて自分で仕事を起こせればという考えがあることが分かりました。

●Ｃさん宅

ⅰ家族構成

老夫婦の２人(娘２人、現在東京在住)、職業は農業。いんげん・白菜・だいこん・かぼちゃを栽培しており出荷をしているのはいんげんのみ。

ⅱ交通手段

福島交通バス(塙町まで片道約 800 円)

午前中１本、午後２本のバスを利用している。

ⅲ生活で不便を感じること

後継者が来ないこと。また、病院(医療)などに時間がかかることが不便に感じている。なにより年配者にとって健康が重要なので医療に不安を感じている。

ⅳ矢塚区の誇れるもの・自慢できるもの

野菜(高原野菜)、矢塚自体が誇りであり、矢塚の人たちと人と人との繋がりが誇り。

ⅴ矢塚の今後

後継者が来てほしい。そのためには矢塚区を若者が住みやすいようにしていかなければならない。矢塚区の今後は人と人との信頼がなければならない。（意志が必要）

「訪問して感じたこと」

Ｃさんの話を聞き、初めて矢塚が出来るまでの話を聞きました。想像をはるかに超える

話であり、矢塚の人たちにとって矢塚がどんなに大切なのかが痛いほど感じられました。

今回の聞き取り調査は、地元の人と直接触れ合う事ができとてもよい調査だと感じました。地元の意見を尊重し問題を解決していかなければならないと感じました。

⑥ 第 6 回現地調査

第 6 回調査は 2010 年 11 月 3 日～4 日、湯遊ランド塙に 1 泊 2 日で実施しました。調査の主な内容は、矢塚区の方々との交流、ヒアリング、農林業体験でした。その概要は次の通りです。

蒟蒻畑で農業体験をしました

区の主要産業の一つである林業を体験しました

●体験交流

・ 片貝ロードレースへの参加（塙町片貝地区内の区単位での駅伝レース）
・ 片貝地区交流会（バーベキューパーティー）への参加
・ 矢塚区の方々との交流会
・ 林業体験、野菜（セロリ）･花卉（ダリア）収穫体験、こんにゃく収穫・製造体験

●矢塚区聞き取り調査

ⅰ生活で不便を感じること
・笹原小学校からのスクールバスの予定が無い。
・矢塚区の分校が廃校になった場合は子どもたちは笹原小学校へ通うことになる。
・小学校へは、車で３０分かかる。冬場では雪道が危険。
ⅱ他地域の人に誇れる・自慢できること
・地域共同体としての人間関係は濃密
ⅲ矢塚区の今後（どのようになっていけばいいか）
・畜産、林業をやっていくしかない

農業は冷害があるので難しい
・過疎の問題は経済的なことではなくて、地域としての生活基盤がなくなるのではないか
・スクールバスに関しても自分たちのことだから、行政に言うべきではないか

●成果について

今回の宿泊調査で、矢塚区に調査に来たのは６度目になりますが、矢塚区の観光・交流人口の増加をはかるために、矢塚区（あるいは塙町）が対外的にアピールできるもののイメージ案は出来上がってきたように思えました。矢塚区での１番の強みは・地域共同体としての人間関係の濃密さであり、区の一体感が大変強いことです。その一体感を今回の集落活性化調査のプロジェクトで、全面的に協力してもらいたいと改めて感じました。次回行われる中間発表での、集落活性化へのアイディアでは、女性をメインにした美容の旅行パックの提案、矢塚区の野菜を産地直送したレストラン「矢塚キッチン」、水ビジネスへの介入、家族連れをターゲットにした低価格の山村体験の旅行プランなどといった意見が出されました。これらの案の実現のためには、すべてにおいて矢塚区の住民の方々の協力は必須です。今後は、集落活性化へのアイディアのシミュレーション、資金源など具体案を研究していきたいと思います。

●反省

集落活性化へのアイディアでは、斬新なものを練ることが出来ませんでした。矢塚区の良いところ、矢塚区が抱える問題、改善すべき点は見えてきましたが、私たちのイマジネーションが足りなかったように思えます。今後行われる中間発表に向けても、学生同士で改めて意見を交換し合い、よりよいアイディアを出していくべきだと思います。

塙町の特産品の一つであるダリア摘み取りを体験しました

湯遊ランドはなわで矢塚区の方々と交流を深めました

Ⅳ　矢塚区調査結果の分析のまとめ

1. アンケート結果から

今回、既述の整備事業計画を含め、矢塚区の現状と地域活性化についての意見を聴取するため、矢塚区民の全世帯に対しアンケート調査を実施しました（8 月に矢塚区各世帯への回覧板を通じて配布、区長が回収（回収率：51.4%）、記述式）。主な解答を列記すると以下のとおりです。（アンケートの質問･回答内容は資料編を参照）。

- 矢塚地区 30 戸で高齢化が進んでいる中、里山プラス地域活性化が頭に浮かばない。
- 豊富な森林資源、新緑、紅葉の美観は際立つ。山頂の景観は素晴らしい。
- 育牛・トマト・インゲン・トルコ桔梗を産出している地域ブランドは無い。
- 地域共同体としての人間関係は濃密であり、区の一体感も強い。
- 結婚適齢者が結婚していない。
- 廃屋や無住宅家屋があり、集落の荒廃感を印象づける。
- 農産物を作っても農協だけが頼りので売価が低い。
- 農閑期なら手伝う・労働力で協力する。
- 活動主旨を地域住民に説明説得して地域一体感で参入できる為に働きたい。
- 矢塚区の将来ビジョンを明確に定めて取り組む必要がある。
- 増大する高齢者の労働力を活用する新たな産業の開発はないか。

2 矢塚区の強み･弱み～調査内容から～

これまでの地区住民へのヒアリングおよびアンケート調査、現地のイベントへの参加や実地見学などの調査内容から、塙町矢塚区の強み・弱みを整理すると次の通りです。

- 強み
  - 濃密な人間関係、区の一体感も強く、中心メンバーのやる気がある
  - 食材が豊富（山菜、高原野菜）
  - 豊富な森林資源、河川、新緑、紅葉の美観は際立つ
  - 標高が高いため、夏でも涼しいなど春～秋は過ごしやすい気候
- 弱み
  - 情報通信インフラおよびソフトの不足（→解消予定）
  - 交通アクセスが悪い
  - 高齢化・人口減少・若者が少ない・嫁が来ない
  - 農産物を作っても農協だけが頼りなので売価が低い（規格外野菜がもったいない）
  - 地域ブランド力がない、地域づくりのノウハウ＋経験不足
  - 女性の活用

3 矢塚区活性化の方向性

これまでの調査の中で、住民の中から提案された改善点、今後の方向性を踏まえ、以下のような事項を検討する必要があります。

●改善点

① 廃校の農業の研修所施設、農業体験や林業体験施設、宿泊施設、林間学校を開くには

・廃校の改装工事が必要 ⟶ 改装費用はいくら使えるのか

・農業研修、農業体験、林間学校を開く際に誰が運営し、事業を進めていくか

⟶ 矢塚区のボランティア、有志が必要

② 地形を生かした展望公園やアスレチック場、トレッキングコースなどを作るには

・道路や山道の拡張、整備が必要 ⟶ 費用はいくら使えるのか

・山のビュースポットのリストアップ

・山の案内人を育成

③ 山菜の無断伐採

・県庁と協力し、山に入る観光客を管理する

④ 農作物の販売ルート

・農協だけで販売するのではく、矢塚ブランドの野菜を作り、インターネットが通信ができるようになった際には、ネット販売をする

⑤ 里山づくり

「里山」という言葉がひとり歩きしてしまって、具体的に何を里山でやるのか、何を売りにするのか、どんな体験ができるのかというプランが全く無い。

里山でどんな体験ができるのか、どんなことをするのか具体的な構成を練るべきである。

●方向性

① 観光振興 ⟶ 拠点の設定 ⟶ 資本投入 ⟶ 経済効果

・・・地区民に経済効果波及するか

② 都市部との交流 ⟶ イベント設定 ⟶ 人の流入増大

・・・定住化（人口増）に繋がるか

③ 産業育成 ⟶ 地域特産品の研究、開発⟶ 雇用の増大

・・・地域単独の取り組みには限界を感じる

④ 増大する高齢者の労働力を活用する新たな産業の開発は無いか（高齢者の労働意欲は高い）

Ⅴ　矢塚区活性化のためのアイディア

これらの分析を元に研究グループでは、1．塙町で若返りツアープロジェクト、2．女性の力を活用した矢塚キッチン、3．二地域居住推進プロジェクトの 3 つの案を提案します。基本は矢塚の強みを活かし、弱みを克服して強みに変えることです。

1 塙町で若返りツアープロジェクト

＜提案の理由＞

塙町の温泉などと矢塚区の食材や自然環境をコラボレーションして、自然志向、健康志向の女性などをターゲットにした健康ツアーを開発すれば、交通アクセスの悪い地域でも魅力的なメニューとして受け入れられるのではないかと考えた。

- 趣旨
  - 温泉、山、川、食材など矢塚区周辺の自然資源を最大限に有効活用し、組み合わせる⇒ネットワークによる相乗効果を図る
  - 塙町と矢塚区が連携をとり、女性層のお客を増やす
  - 口コミで女性のネットワークで矢塚区の知名度を少しづつ上げていく
- 内容
  - 高原野菜と山菜を使った体に良い自然健康食
  - 遊歩道と川でマイナスイオンを浴びる
  - 湯遊ランドはなわ「若返りの湯」で健康に
- ターゲット
  - 女性、高齢者、癒しを求める現役世代も
- 課題
  - ネットワーク化・メニュー開発が急務、コーディネーターが必要
  - 高原野菜と山菜を食べられる施設がない

2 矢塚キッチンプロジェクト

＜提案の理由＞

- ✓ いただいた矢塚の野菜が本当に美味しいので実際に食べることでそれをみんなに知ってもらいたいと考えた。
- ✓ 区のおばあさんがやっている野菜の直売所で置いている漬物が人気で、わざわざそれを買いに遠くから来る人がいるという話を伺った。
- ✓ 先日の調査の折、区長の奥様が私たちに昼食として作ってくれた炊き込みご飯などが大変美味しく、作り方を教わりたいと思った。また、どの料理も野菜を主に使用しておりヘルシーなのでとくに女性に喜ばれるのではないかと考えた。

- 趣旨
  - 矢塚産野菜に付加価値をつける⇒料理の開発、ブランド化
  - 女性の力を活用⇒女性が主役
- 内容
  - 矢塚の高原野菜、山菜を食べれるレストラン・食堂を作る
  - 農家レストランとして、区民の農家の方の自宅で営業してもよい
  - 取れたての新鮮野菜を地産地消する、レシピを開発
    - 高原野菜の天ぷら、山菜炊き込みご飯
  - 行楽シーズン、ベントに合わせるなど、外部から人が集まる際に開店
- 課題
  - 店を広告する情報網が狭い
  - 安定的な売り上げの確保

3 二地域居住推進プロジェクト

＜提案の理由＞

・実際に矢塚で二地域居住をしている方の話を聞き、その暮らしに魅力を感じた。

・冬は寒さが厳しいが、その他の季節は涼しくて過ごしやすい気候であり、紅葉が綺麗であるなど自然も豊かである。住民の方誰もが優しく接してくれて温かい地域なので日常の疲れを取る癒しの場所として休日ここで過ごすなどの二地域居住が良いのではないかと考えた。

- 趣旨
  - 標高が高く夏が涼しい矢塚を避暑地としてアピールして、山中の隠れ家のような別荘地として二地域居住を進める
- 内容
  - 区内の空き家などをリフォームして首都圏居住者の別荘にする
  - 買い物や飲食できる施設学内に無いので「湯遊ランドはなわ」とタイアップするなどソフトを充実させる
- 課題
  - 場所が分かりにくい→手書きのマップ、看板
  - 新規参入者と元々の区民が仲良くやっていく

Ⅵ おわりに

矢塚では区長を中心とする区民有志により、地域づくり活動が取り組み始められましたが、そのきっかけは、区内の片貝小学校矢塚分校が廃校になることでした。さらにその本校も廃校になり、別の地区の小学校に統合される予定であり、児童は家から離れた遠い学校に通学せざるを得なくなります。少子化が進む中、子供の教育環境が悪化することは地区にとって致命的といっても過言ではありません。

地域活性化という観点から、客観的条件を並べれば有利な要素は少ないと言わざるを得ません。この地域で持続的発展を図ることは可能か、さらに言えば意味があるのかという根本的な問いは、人口減少が続く多くの過疎地域に共通する問題といえますが、問いかける力さえ残っていない地域も少なくないのが現状です。

その中で矢塚区はいくつか興味深い特徴を有する地域であり、それは一筋の光明であると言えるかもしれません。

例えば、矢塚区ではこれまで何もやってこなかったかといえば、むしろ他地域よりも献身的に様々な活動を行っており、そのベースとなるのが、分校、そしてその PTA です。小規模集落ゆえに親子 2 代で PTA 会長を務めた家も珍しくなく、とくに近年は子供を媒介に、そして子供たちのために様々な行事を地区ぐるみで行ってきました。その意味で、分校の廃校は区民にとって大きな衝撃だったろうと思います。

こうした分校を中心としたコミュニティは、矢塚区が開拓地であったことと無関係ではないかもしれません。矢塚区は、戦後入植して木炭製造などを生業にした人々が開拓した地区で、そのため地域活性化のカギとなる歴史的遺産には乏しいです。逆に、教会こそないものの、地区ぐるみで学校を盛りたてる姿は、「大草原の小さな家」を彷彿とさせる開拓者の気風であるようにも思われました。今回の調査で、入植時を知る第一世代の高齢者の話を聞く機会がありましたが、自然条件に恵まれないこの地での苦労と深い愛着には胸を打たれました。同時にこの開拓精神は、伝統的部落にはないものではないかとも感じました。

矢塚には多くの自然資源とともに、それを活かしてまちを活性化しようとする人がいます。あとは、活性化プロジェクト推進のための体制づくりが最優先課題だと思います。そのベースとなるグループが既に活発な活動をしていますが、まだいいものがたくさんあるのに活かせていないし、まだ矢塚区（塙町）の情報が少なすぎます。また意欲があっても活動できない人もいて、今後外部から客を受け入れていくためには、「よそ者、バカ者、若者」そして女性や高齢者を入れた組織づくりが不可欠だと思います。その上で、将来的には商品化・ブランド化を戦略的に進めていくことが必要だと思います。

謝辞

今回の調査では、渡邊松吉区長を始め矢塚区の方々には本当にお世話になりました。みなさんのこの地域を活性化させたいという熱意にはとても心を打たれました。特に私たち女子学生からは、女性の頑張りに目を見張りました。この地区の頑張りを見て、“人が地域活性化の最大の資源”を実感させられました。人を大切にし、それが地域活性化の原動力になっていくことを矢塚で改めて学びました。

また、本事業の全体を通して、福島県地域振興課の小林健太郎さん、引率してくださった東日本国際大学の福迫昌之先生、山田紀浩先生には大変お世話になりました。ここに記して、御礼申し上げます。

意見交換会の様子

資料編

資料１ 福島県「大学生の力を活用した集落活性化調査」に関するアンケート
＜調査結果＞

資料２ 韓国人から見た日本の中山間地活性化～塙町矢塚区～

資料３ 集落活性化県民討論会のまとめ

資料１

福島県「大学生の力を活用した集落活性化調査」に関するアンケート
＜調査結果＞

１、矢塚区では、片貝小学校矢塚分校の廃校を見据え、矢塚分校裏山の里山づくりを進めています。この里山の活用策、里山周辺と一体化した地域活性化策などについてお考えがあれば聞かせてください。

・分校建物を地区の人の冬場の作業場に使う
・分校を林業、農業の研修所施設に使う
・学校を宿泊できるように改装し、農業体験や林業体験できる施設にする
・校庭を利用してキャンプ場を作る
・塙町の中で、ほぼ最南端に位置し、標高８００m近い山々は望めがよく星空も大変きれい
・分校建物を部落の人たちの集合の場にする
・分校建物を夏休み等に都会の子どもたち来ていただき林間学校を開く
・道路拡張による安全の確保
・里山に観光客が来るのを期待し応援したい
・矢塚地区３０戸で、高齢化が進んでいる中、里山プラス地域活性化が頭に浮かばない
・「矢塚分校」＋「希望の森」を拠点とした観光施策では規模が小さく集客性に疑問を感じる。
上記拠点に大平渓谷と周辺山林をセットした周遊コース
（ハイキングコース or トレーニングコース or 食べ歩きコース or 宿泊等）

２、観光・交流人口の増加をはかるために、矢塚区（あるいは塙町）が対外的にアピールできるものを何でもおきかせください（場所、施設、イベント、伝統工芸、地勢、動植物、人物 etc）

・雑木林の紅葉
・山菜、矢塚特産物を区民全員が四季に渡り販売する
・夏の涼しさ、蚊がいない
・土地が広くて、１世帯ごとの所有地が広い
・高原野菜、空気
・木工品を作る、野菜を作る、花を作る
・山菜、きのこ、石
・町の花火、矢塚の野菜
・農薬などが最小限に抑えた野菜作りが出来る、標高があるため（標高７５０m）涼しいのでよい野菜が取れる
・塙、高萩線の整備をし、活動しやする
・若い人のお嫁さんをもらう

・湯遊ランド
・盆踊り、やまめつかみ取り大会、湯遊ランド、道の駅、産業祭、灯篭流し
・豊富な森林資源、新緑、紅葉の美観は際立つ
・冬は激寒地（－16℃～－18℃）
・山頂の景観は素晴らしく夜空の星座も美しい
・育牛・トマト・インゲン・杜若・トルコ桔梗を産出しているが地域ブランドは無い
・地域共同体としての人間関係は濃密であり、区の一体感も強い

３、矢塚区が抱える課題、直していかなければならないことなどをお聞かせください。

・河川の汚れ（ビニール、発泡スチロール）
　育牛排水、生活排水の基盤整備が不十分なため、河川の汚染が進んでいる
・地域を縦断する県道が狭いので人が来ない
・農産物を作っても農協だけが頼りなので売価が低い
・街に出るのに時間がかかる
・道路の土手の草もう少しさっぱりさせる
・携帯がどこにいてもつながるように
・道路整備
・里山の整備
・直すところは今のところない
・老齢化
・冬の雪道の道路交通
・よそ者が来て山菜を採っていく
・若年層の減少
・分校の廃校
・結婚適年齢者が結婚していない
・廃車を物置代わりに使用しているため景観を損ねさらに農地汚染につながる恐れがある
・廃屋や無住宅家屋があり、集落の荒廃感を印象づける

４、観光・交流事業を行う場合、どのようなかたちで参加、活動できますか（すでに活動しているものも含む）

・農閑期なら手伝う
・労働力で協力する
・会社の休みに参加する
・できれば大いに参加したい
・ボランティア
・イベントへの参加

・応援する
・年金生活と農業で参加は難しい
・事業活動が具体化した場合も調査のサポート、スタッフの受け入れ（ホームステイ、ガイド等）など積極的に参入したい
・活動主旨（目的、手段等）を地域住民に説明説得して地域一体で参入できる為に働きたい

５、その他矢塚区のまちづくりや活性化に関連することを、何でもお書きください。

・矢塚区の特産品を作りたい
・地区一帯で農産物の流通システムを定めて適正価格で生産したい
・今のままでいい
・遊休農地を利用する
・今回のことを契機として、区民全体で話し合う場ができればいい
・若年層を増やす
・若い人たちに頑張ってもらうしかない、協力は惜しまない
・現在は是は是、非は非、と言える人がいなくなってきている。私は恐くて信頼される老人になっていきたいと思う。時間はかかると思うが人に信頼されてこそこの地は活性化すると思う
・県道１１０号線の拡張工事
・自然作り
・若者、未婚者が家庭を持つことを自然体と思う努力をすることが定着すれば自然に活性化につながると思う

資料 2

韓国人から見た日本の中山間地活性化～塙町矢塚区～

①

11 月 3 日～4 日に塙町へ訪問しました。福島に来て約 2 年半、いわき以外の福島県内は行ってみる機会があまりありませんでした。塙町はいわき市と約 1 時間半離れていて、山の奥に位置している小さい規模の町です。

はじめに訪れた場所は塙町立片貝小学校でした。ちょうど町の皆さんがリレーを始まる前だったので、応援しながら一緒に楽しみながら見ました。観覧している間、かわいい小学生の女の子が来て、私たち 3 人を珍しく思って見ていました。‘外国人だけど日本語は大丈夫よ’というと、すごく照れながら一緒に遊ぼうと言いました。世間ずれしていない純粋な女の子の姿を見て、田舎の魅力はこれではないかと思いました。リレーが終わって皆さんとバーベキューをしながら会話をしました。話題になっている韓国の女子アイドルなどの話を出しながら少しでも私たちを楽にさせるように気を配ってくださいました。

日本人学生が現地を視察する間に私たちは道の駅はなわへ行ってきました。そこは塙町の特産品を扱っている農産物直売所があります。そして食堂もありましたが、特に塙町の食べ物はありませんでした。普通にどこも売っているカレーライスや天ぷらなど、地元の食材を取り入れていてももっと塙町を知らせる食べ物が必要だと思いました。ダリアアイスクリームを販売しているのを見て、アイスクリームだけではなく、ご飯や汁物などにも入れてみるのはどうかと思います。

宿泊は湯遊ランドはなわでした。公休日のせいか温泉客が考えた以上に多くて驚きました。住民との対談会をする前に時間がありましたので久しぶりに温泉を楽しみました。施設が大きくて設備もよく出来ていて、広告をもっとするとよく訪れる場所になれるのではないかと思います。

住民たちと会話をして見た後、そこから出たくない気持ちがよく伝わってきて、どんな方法で住民たちの生活が豊かになるかについて考えてみました。2 日目に経験したダリア栽培やセロリ栽培、こんにゃく作りを観光客にも体験できるカリキュラムを作って見たらどうかと思いました。特にセロリの葉っぱを天ぷらで食べてみてとても美味しかったので、それも含めるともっといいのではないかと思います。

これらを全部含めている「週末家族農場」の運営が一つの方法だと思います。普段、都市に住んでいる子どもは農村と触れ合う機会があまりないと思います。おもちゃで遊ぶより土を触りながら育てる方法が子どもの成長に良いと聞きました。週末に行って 1 日または 1 泊 2 日をしながら、自分の手で植えたものがどんどん大きくなっていく姿を見ると、きっと喜んでもらうと思います。住民たちはそれも補助する役割で、よく育てるように面倒を見てあげる形で運営するといいと思います。

そのほか、近年に完了すると言ったケータイ電波設置は早めに設置した方がいいと思い

ます。韓国では携帯電話がつながらない場所が少ないので、不便で、親もとても心配しました。

（東日本国際大学経済情報学部３年　　）

②

１１月３日と４日、一泊二日に塙町というところへ行きました。日本に留学来てずっといわき市ばかりだった私には、いわき市を外れ、他の地域に行くそのことが楽しみでした。

８時４０分出発して、１０時半頃塙町に着きました。そこでは、駆け比べが始まり、小学生の子供たちが走っていました。

先日、山田先生に“私達も走るからジャージーを着て来い”と言われましたが、なぜ田舎研究なのに走るんだろう？と思いました。でも、実際行って見て分かりました。

小学校と言っても、規模が小さくて学生数は２０人もならない。学生と親、地域主民みんなが集まってイベントを行っていました。私は結局走ってなかったが、次また機会があったらぜひ参加したいと思いました。

その後、神社に行きました。小さい神社でしたが、きれいに保存されているし、そこから見える景色も素晴らしいと思いました。そして、ただ見るのではなく渡邉さんからの説明も聞き、そこの歴史も知り、非常によかったです。

そして、山田先生と塙町の視察をしました。塙町の名産物や景色がいいところを探しました。塙町はいわき市とは一時間半くらいのところですが、雰囲気と景色は全然違いました。紅葉もきれいし、紅葉と紅葉の間には小川の水が流れ映画にでる一場面みたいでした。このきれいなことを大勢の人たちに見せたいと思いました。

そして、バーベキューパーティーと宴会では、地域の人々に色々な話を聴き、コミュニケーションを取ることもできました。

二日目は９０年になった木を切ることを見学しました。山の頂上に行ったことも初めてで、木を切ることも初めて見ました。目の前で何十メートルの木が倒れるのは新鮮でした。都会の子供達や学生もこういう経験して、塙町の魅力を知ったらいいなと思いました。

一泊二日の短い時間の研究でしたが、普通見られないことや経験できないことをいっぱい体験しました。本当に塙町に来て良かったと思いました。

（東日本国際大学経済情報学部３年　　）

③

私は東日本国際大学の福迫先生の地域研究ゼミの一員として、いわき市の塙町というところに一泊二日間の田舎をお泊りするという体験をしてきました。まず初日は、塙町にある小学校で行われたマラソンにスタッフとして参加しました。マラソンの参加者は

ちょっと少なかったんですけど、町の住民とかもマラソンに参加して良い雰囲気で行われました。

しかし、その小学校は、塙町の一つしかない学校で、少ない学生数のため、もうすぐ学校が無くなると聞きました。それで、小学校が無くなると塙町の子供たちはどうすればいいのかと思いました。これは小学校だけではなく、塙町は高齢化してあって財政的にもだんだん崩れていて、塙町に住んでいる住民は他のところに移住しなくてはいけない状況になっています。でも、だいたいの塙町の住民は今まで住んできた塙町を捨てて、移住することを拒否しています。私はこの状況を聞いて、今まで住んできた町から離れない住民の気持ちがわかってきたので、切なかく感じられました。

そして、マラソンが終わってから、塙町の住民たちとのバーベキューパーティーが行われて、その日の夜には、また塙町の住民との交流会が行われました。

そこで、塙町の住民と話しながら、またお互い交流を深めることができたし、いろんな塙町のお話を聞いて、いろんなところで意味があった交流会でした。

そして、次の日には、塙町の家庭訪問としての体験をしました。家庭のお料理を食べたり、コンニャクを直接に作ってみたり、生け花の体験をしました。初めての体験だったので楽しかったし、田舎をずいぶん体験できるようになりました。

最後に、この二日間の塙町の体験から、崩れて行く塙町を守ろうとしている住民の努力が伝われてきました。塙町も守るためには、住民たちが力を合わせて、塙町をもっと広く知らせるために頑張らないといけないと思います。塙町の有名なお花のダリアとかをテーマにした観光地とか塙町の特色なところを考えて産業的に利用するとか、塙町を守れるために考えないといけないと思います。

（東日本国際大学経済情報学部３年　　）

資料３

集落活性化県民討論会のまとめ

日時：平成２２年１１月１９日（金）１３：３０～１７：００
会場：杉妻会館　　４階「牡丹」

＜日程＞
１、　　開会
２、　　挨拶
３、　　大学生グループ・集落者コメント
４、　　主催者コメント
　福島県知事　佐藤　雄平
　（休憩）　　（記念撮影）
５、　　討論
６、　　閉会

＜大学生グループ＞
・宮城大学風間ゼミ── 白髭集落（二本松市）
・東日本国際大学まちづくり研究グループ ── 矢塚区（塙町）
・日本大学工学部情報研究会── 野行地区（葛尾村）
・福島大学 C プロジェクト── 佐須地区（飯館村）
・福島大学西川ゼミ ──　沢渡地区（いわき市）

・各発表グループのまとめ、感想
〇宮城大学風間ゼミ── 白髭集落（二本松市）
・白髭集落の魅力は大きくわけて自然の美しさ・人のあたたかさ
・観光地ではなく永続的なコミュニティが必要
・白髭集落内で行われるイベントに住民の中にスタッフ側として飛び込む。（＝DIVE する。）
・事前準備から加わり住民とともに達成感を分かち合う。
・定住のためのコミュニティを創造する
・「しらひげ DIVERS 倶楽部」形成
感想・意見
この提案は「しらひげ DIVERS 倶楽部」として倶楽部を有志の学生で運営していくようだ

が、その倶楽部が永続的なコミュニティとして続いていくものなのか。
学生の有志が集まらなくては倶楽部は無くなり、コミュニティーは途絶える。学生が常に携わるのではなく、いずれは住人が住民の力によってコミュニティを持続していく形に繋げていくべきである。

○日本大学工学部情報研究会── 野行地区（葛尾村）
・村長が考える村づくりを根底に企画を立ち上げる
・野行地区の「心」に合った住民を集めて地区の活性化を図る
・地区の方と学生が協力して持続的に進める
・ブログの定期更新、SNS を使用したコミュニケーションをする
・「のゆき」体験ツアー実施
感想・意見
情報を活用した具体的な広報内容はよい。体験ツアーを作成するにあたっては、住民との綿密な打ち合わせ、シュミレーション、信頼関係が必要である。その体験ツアーを作り上げていくにあたっての住民との交流は、「心」という野行区の活性化のテーマに沿った企画で、よいのではないかと感じる。

○福島大学 C プロジェクト　　佐須地区（飯館村）
・地区のみんなが楽しむ、都市の人々も一緒に楽しむ
・地区住民が事業を企画・実施
・佐須地区の PR
・街なかマルシェの参加
・都市と農村の交流イベント「までいな休日」開催
感想・意見
街なかマルシェの参加やまでいな休日など、アイディアが多く面白い。「までいな」というテーマが住民の歩調と合っていてよい。住民が企画を考えることによって、活気と積極性も高まり持続的なものへと繋がるように思える。

○福島大学西川ゼミ ── 沢渡地区（いわき市）
・地域の人々の生きがいづくり
・地域を知り尽くした人々たちが、地域の魅力を伝える
・地域伝統を衰退させないように地域住民への地域活動への参加の必要性の理解
・グリーンツーリズムによる地域活性化
・宝探し、林業体験、ものづくり体験、ソバ打ち体験などのプラン
感想・意見
グリーンツーリズムによるプランの内容が浅い。林業体験・ものづくり体験・ソバ打ち体

験などは、わざわざ沢渡地区に行ってやりたいという魅力的なものではない。地域伝統を衰退させないように実施するのであれば、アピールするべき地域伝統は他にあるのではないか。

・塙町矢塚区の調査報告の反省

報告書の内容は、アンケート調査・意見交換会や実地調査などは詳しくできていたと思うが、アイディアを今後どう進めていくべきか、どう運営していくかの具体的な計画ができていなかった。現在インフラの整備ができていないことや、交通アクセスが悪いなど悪条件があるが、今後活性化にむけて、具体的な思案が必要である。

若返りツアーや二地域移住などのプロジェクトがあったが、先を見越した大きなプロジェクトよりも、まず今できるアイディアとしては、手始めとして本大学の文化祭で矢塚キッチンをオープンさせてはどうか。宿泊調査で食べた山菜の天ぷらのおいしさは今でも忘れられない。矢塚で取れる食材をベースとしてキッチンを開店させ、野菜や花、加工品なども売り、矢塚のことを知るマップを作成し配布することによって、少しでも地域住民や学生に矢塚を知ってもらうことが、地域活性化の第一歩となるのではないか。

・集落活性化県民討論会名参加して

集落活性化県民討論会に参加し、各大学の研究発表を聞き、学生の熱意を感じた。討論の中で研究の引継ぎの課題について、学校という機関内だけではなく、NPO 法人として一般の人とも活動できるのではないかと意見が出た際、地域活性化に対する真剣さ本気さが身に沁みて伝わった。

それと、地域活性化の根本的な課題は「持続的・永続的」にできるか、「住民が主体となった活動」とつながるか、であると感じた。学生がメインとなって活動していき、一時的なイベントと化してしまったら意味がない。その地区に住むのは住民であって、その活動が持続的に続いていかなくては活性化とは言えない。そのためには、住民が主体とならなくてはいけない。

今後、地域活性化研究に携わるに当たっては、今回グループ発表で各大学での取り組みも参考にし、地域住民による地域住民のための活性化を目標に研究していきたい。